

松陰先生の勤勞教育

宇 多 田 亮

近時、我國に於ては從來の教育が餘りに智育・觀念教育に走り過ぎて居ると言ふので、其の反動として勤勞教育、作業教育が喧しく論ぜられるに至り、夏季休暇も廢して勤勞作業によつて鍛鍊をする所謂鍛鍊期間として、全日本の中學校・高校・大學迄これを實施したのである。さて此の事の教育上の可否は種々議論もあらうが兎に角我國教育上の一大變革として極めて興味深い現象である。

勿論本年は初めての事であるから、私の眼にさへ改善すべき點が多々映するのであり、殊に形式だけにさへ走つた物をも認めるので有るが、これについて私は幕末の志士吉田松陰先生の教育―特に其の勤勞教育を思ひ出すのである。

松陰先生は人も知る如く幕末日本の生める愛國志士であり、偉大なる教育家である。松陰先生を偉大なる教育家と呼ぶのは、決して松下村塾から維新の元勳を雲の如くに出したが故では無い。彼を偉大なる教育家と言ふのは其の教育信念が卓越し、其の教育方法が傑出して居たからである卓越した教育信念と傑出した教育方法から維新の元勳多數を生み出したのは當然の結果である。

松陰先生の教育に就て言ふ可き點は多いが、此所に其の勤勞教育、或は作業教育に就て述べて見ようと思ふ。

松陰先生の生涯は、それ全く實行・實踐の生涯であつて、其所に空理空論は微塵も認められない。先生の生涯は時に極端に流れる事は有つても終始實行實踐の生涯で有つた。實行家であつて理論家で無かつた所に先生の生命があつた。さ

れば先生は口先だけの尊皇論者で無く尊皇實行家であつた。口先だけの開港論者で無く、自ら先づ外國の模様を實地に見聞せんとする實行家であつた。

さうした實行に終始した松陰先生の教育が、單なる理論に止まらないで、常に實行の教育で有つたのは當然である。

松下村塾に於ける松陰先生の教育は勞働しつゝ勉強する勤勞作業主義の教育であつた。

米を搗きながら、草を取りながら教育する半勞・半學の教育であつて、生活と學問とがびつたり一致した教育であつた。現在の學校教育の如く生活と學問が全然別個の存在で無く、全く生活學問であつた。

松陰先生のさうした勤勞主義教育は其の由來する所が、松陰先生幼時の教育に有るのである。

乃ち松陰先生の生家たる杉家は代々毛利家に仕へて居たが、微祿であつて、其の生活は決して餘裕有るものでは無かつた。松陰先生の實父は杉百合之助と言つて非常に謹嚴な敬神家で有つたが、武士とは申しながら、其の生活は寧ろ農民に近い生活で有つて、百合之助は毎日の様に飼馬をひいて先生と其の兄の梅太郎の兄弟と共に、自分の家より半里離れた所へ朝早く朝食前に草刈に行き、日中は一家總動員で田圃へ出て働く。

こゝした田園生活の間に、田園に働きつゝ二人の子息に書物を教へ授けたのであつて、松陰先生は四書五經は田畑の中で、働きながら覺えたので有る。

夜になると先生兄弟は米を搗いたので有るが、其の時に、先生は必ず米搗棚の上に書物を置いて勉強したのであつた。だから先生幼時の勉強は机上に於て行はれるよりは、こゝした勞働の間に行はれたのであると言へる。

かくの如き先生が父百合之助から施された勞働しつゝ勉強する半學半勞の生活が基調となつて、後年の松下村塾に於ける勞作勤勞の教育が行はれたのである。

さて村塾の勤勞教育について述べなければ成らなくなつたが、松下村塾零語の中に、

『杉の邸内に畑多し、春夏の交、先生出て草を除く、門人も従ひて之を助く、先生草を除きつゝ讀書の方法又は歴史の談話を爲す、門人愉快にたへず之を楽しみとす』とあるが、これによつて見ても村塾の勤勞教育なるものが、松陰先生若かりし日の、田園生活に伴へる勉學に基いて居る事が知れよう。

先生が理想とした學校は、

『先づ郊外數里の地に當つて廣敞の宅地一區を買得し、前左右に長屋を作り之を廻らし、江戸藩邸の如く小屋々々を割り、屏壁を以て限り、一限りの廣さ十數坪に過ぎず、余自ら其の宅を司り、同志の士又は從學の士等へ各一限りを貸與へ住宅せしむ。其の中央に一大堂を起し、會調會讀又は賓客等の事ある時は皆大堂に於てす。又其の内に空地を廣くし、演武場とし隊伍坐作の法、銃馬刀槍の技をも茲にて習はし、後ろは田畠・山林に連り文武の餘暇を以て各々耕耘樵蘇をもなすべし』

これが先生の理想の學校であつた。今日の寄宿舎生活と學校生活とそして田園生活の三者を合して一つにした極めて徹底した半學半勞の學校であり、家庭であつた。

これが先生の理想であつた許りでなく、先生はこれを村塾の教育に實行して居るので有る。

乃ち其の例を擧げれば、野村靖子爵の思ひ出話の中に、子爵十七歳の安政四年村塾に入門しようとして出かけた時に、先生は謹慎中で有つたので袴をはく事が出来なかつたから着流しに小刀を腰を帯び、二三の門弟と共に裏の畑に出て、大根の草を採つて居られたとの一節が有る。これは明らかに先生の半學半勞教育を示すものである。

又品川彌次郎子爵の追憶談中に、かつて塾舎が狭くなつたので、古家の四疊半と二疊とあるものを買ひ、これを塾舎

に移して増築した時に、先生始め門下生一同一緒に成つて此の工事に働いた。其の時、子爵が壁を塗るのを先生が下から泥を差し上げて手傳つて居られたが、子爵が泥を受け損じて先生の顔面に落して、眼や口にしたゝか泥をかけた事がある云々と言はれて居る。これ又塾舎増築に先生も弟子も協力して働いた今で言ふ勤勞奉仕作業が行はれて居る事を知るのである。

又村塾の日記によつても知られるが、先生及び生徒が交代で飯を炊いて調理し、薪や木炭の如きも皆各自交代で市場へ行つて買ひ求めて來たので有つた。

松下村塾に於て、「村塾作間一道」なる印刷物を、村塾に於て、塾生等の手で木活字で印刷して居るが、これ亦松陰先生の勤勞主義教育の一つの現はれで有る。

そして松陰先生は安政五年に「學校を論ず、附作場」と言ふ論文を書いて、其の中に大いに勞作主義教育を高調して居る。

此の論文に於て、諸種百藝、乃ち兵、農、曆、草、天文、地理等に長ずる者を集めて指導者とし、學校に船匠・銅工・製藥・治革工等の技術者を集め、空疎なる讀書人で無く、實技・實能の人を養成すべきで有ると論じて居る。

以上述べた通り、松陰先生の教育は、單なる机上の勉強でなく、働く勉強であり、且つ學校と家庭とが別個の存在でなく、全く一體となつた所の家庭即學校の教育方針であつた。

かゝる教育を施した先生は、學問は實生活に役立たねば成らないから、實生活に直接役立つ學問―乃ち實學が重んぜられるに至つたので有る。

だから松陰先生の教育は、當時の一般學者の如く單なる理論のみを授けて事終れりとする觀念教育を排して、飽く迄

人生に直接役立つ實利教育を尊重して居るから、實業教育は先生の特に重視した所で有つた。

従つて先生の教育論中には、當時の學者の一顧だにしなかつた經濟・農業・商業・工業・漁業等の實用教育について論じた物が多いので有る。

以上大體松陰先生の教育に現はれたる勞作教育について記したが、私は此所でもう一度現在の作業或は勤勞教育なる物を反省して見度いと思ふ。

先づ現在の勤勞教育なるものは他の學科から全く切り離された一個獨立の存在である。

これを松陰先生の勤勞しつゝ勉強すると言ふ共學共働主義の教育と比較する時、其所に我々は現代の勤勞教育なるものゝ缺陷を認めるので有る。

現在の勤勞教育は限られたる時間だけの勤勞であつて、我々の生活に常に伴ふもので無い。松陰先生の勤勞教育は、勉強しつゝ働く、乃ち一年が一年中勤勞であつて、勤勞を今日の如く、作業の時間、夏休中だけと言ふが如く限られた時間だけの勤勞で無い所に大きな特徴が有るので有る。

前記の野村子爵の追憶談に知られる如く、松陰先生の勤勞は子弟共同一體の勤勞であつた事に其の特色が見られる。

今日行はれる勤勞作業が、教師は單に傍に立つて指揮監督するだけで、生徒のみが汗して働いて居るのに比べる時、松下村塾の子弟一體となつた勤勞教育は眞に羨望に耐へないでは無いか。

そして更に私は現在行はれつゝある勤勞作業なる物が、身心の鍛鍊であるとか、國家への奉士で有るとかを口に叫んで口實としつゝ、實際はさうで無く、徒らに美しい堂々たる結果を生み出す爲に、生徒の體力、健康状態を全く無視して、唯立派な物！ 譬へば學校林とか、防空壕とか、修養道場とかを造り上げる事にのみ力を注いで居る。其の爲に例

年ならば第二學期の始め、乃ち九月には元氣な丈夫さうな生徒等を見受けるのに、勤勞奉仕に送つた夏季期間を終つて、九月登校せる生徒に元氣の不足し、或は病氣缺席の者さへも出しはしなかつたかと憂へるのである。これが杞憂なら結構だが、奉仕作業の名の下に、生徒を土方代りに、大工代りに使つて居る傾向は無いか。

かく考へて松陰先生の勤勞教育を考へる時、成る程先生の勤勞教育の結果、出來上つた物は目に映する程の大仕掛けの物は無い。大根が出來、豆が出來た位であらう。然し生産物は小さくとも、塾生の肉體に適度に、健康に叶つた勤勞教育であつたが故に、それが塾生等の身心に乃ぼせる好影響は到底今日の勤勞作業教育の比では無いと信ずる。

作業の時間だけの作業、夏休中だけの作業、そんな物が何んになると言ひたい。

村塾に於ける如く、一年中を通じて、他の學科、そして生活と結びついて行はれる勤勞作業にこそ本當の勤勞教育の價値があるので無からうか。

くだらぬ事を考へ、書きつらねたが、要するに現在の作業勤勞教育なる物は徒らに形式にのみ走つて、其の内容に重點を置かない所に一大缺點がある。

それにしても松陰先生が百年の昔に、既にあんなに立派な勞働作業教育を實行して居つた事に我々は驚嘆すると共に、其の衝に當る人々は徒らにハイカラな歐米教育論にのみ惑はされずに、日本の生める偉大なる先覺松陰先生の實行せる村塾教育を大いに反省參考すべきであると思ふ。(完)